

# 「パークランド ケネディ暗殺、真実の4日間」

★★★★

2014（平成26）年7月11日鑑

賞<テアトル梅田>

監督・脚本：ピーター・ランデスマン

原作：ヴィンセント・プリオリ『Four Days In November』

製作：トム・ハンクス、ゲイリー・ゴーツマン、ビル・バクストン、ナイジェル・シンクレア、マット・ジャクソン

チャールズ・“ジム”・キャリコ（新人研修医）／ザック・エフロン

ドリス・ネルソン（看護師）／マーシャ・ゲイ・ハーデン

フォレスト・ソレルズ（シークレットサービス ダラス支局長）／ビリー・ボブ・ソントン

マーガリート・オズワルド（オズワルドの母）／ジャッキー・ウィーヴァー

エイブラハム・ザブルーダー（事件を撮影したビジネスマン）／ポール・ジアマッティ

ロバート・オズワルド（H. オズワルド容疑者の兄）／ジェームズ・バッジ・デール

リー・ハーヴェイ・オズワルド（ケネディ大統領暗殺の容疑者）／ジェレミー・ストロング

オスカー・ヒューバー（神父）／ジャッキー・アール・ヘイリー

マルコム・ペリー（ベテラン研修医）／コリン・ハンクス

ゴードン・シャンクリン（FBIダラス支局長）／デヴィッド・ハーバー

ジェームズ・ホスティ（FBI特別捜査官）／ロン・リビングストン

ケネス・オドネル（大統領特別補佐官）／マーク・デュブラス

ロイ・ケラーマン（大統領特別警護班）／トム・ウエリング

2013年・アメリカ映画・93分

配給／ファントム・フィルム

## <ケネディ大統領は理想像？それとも・・・？>

私の中学時代、アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディは田中校長の理想像だったらしく、彼はその夢と理想を熱く語り、それを愛光学園の教育理念の中心に据えていた。そのケネディ大統領が1963年11月22日に暗殺されたというニュースには驚かされたが、それから半世紀が経った。ケネディ暗殺の犯人とされたリー・ハーヴェイ・オズワルドがケネディの2日後に暗殺されてしまったこともあって、未だにケネディ暗殺事件の真犯人は明らかになっていない。本作のパンフにある土田宏氏（城西国際大学国際人文学部教授）のエッセイ「アイドルだったケネディ大統領」を読めば、土田氏も田中校長と同じように、ケネディ大統領の絶対的な信奉者であることがよくわかる。

しかし、私の大学時代。大学入学と同時に始めた学生運動の中、さまざまなマルクス・レーニン主義に関する必読文献とは別に、日本共産党の機関紙『アカハタ』の1964年3月10日に掲載された『ケネディとアメリカ帝国主義』という「必読論文」があった。アレ、ケネディは世界平和のために尽くした偉大なリーダーではなかったの？その論文では、ソ連のフルシチョフ首相との間で、キューバへの核ミサイル配置をめぐる問題等々を経て、「部分的核実験停止条約」を成立させたのは、前向きに評価できることではなかったらしい。また、その論文は、1960年代後半から泥沼化していたベトナム戦争はジョンソン大統領の責任もあるが、その根本はケネディにあると分析していた。それってホント？実のところ当時の私にはよく理解できなかったが、それでも一生懸命勉強し、夜を徹して議論したものだ。そんなケネディ大統領暗殺をめぐる、4日間の真実のドラマ。こりゃ必見！そう思ったが・・・。

## <本作が描く5つの物語とは？>

『キネマ旬報』2014年7月下旬号の「REVIEW 鑑賞ガイド」によれば、本作は3人の評論家が3人とも星4つと高評価。本作は93分と短い、その中には次の5つの物語と、その中で的人物模様が描かれる。すなわち、

①ケネディのパレードを最新の8ミリカメラで撮影していた、エイブラハム・ザブルーダー（ポール・ジアマッティ）の物語。

②銃弾に倒れたケネディが運び込まれたパークランド・メモリアル病院の、新人研修医チャールズ・“ジム”・キャリコ（ザック・エフロン）、ベテラン研修医マルコム・ペリー（コリン・ハンクス）、看護師ドリス・ネルソン（マーシャ・ゲイ・ハーデン）たちの物語。

③シークレット・サービスの、フォレスト・ソレルズ（ビリー・ボブ・ソントン）、ロイ・ケラーマン（トム・ウエリング）たちの物語。

④FBI捜査官の、ゴードン・シャンクリン（デヴィッド・ハーバー）、ジェームズ・ホスティ（ロイ・リビングストン）たちの物語。そして、

⑤暗殺犯とされた、リー・ハーヴェイ・オズワルド（ジェレミー・ストロング）と、その兄ロバート・オズワルド（ジェームズ・バッジ・デール）と、母親マーガリート・オズワルド（ジャッキー・ウィーヴァー）たちの物語だ。

それらはすべて、はじめて見たり聞いたりする物語だから、それぞれに興味深い。私にはどうしても、「だから、何なの・・・」という疑問が残る。

## <これはニュース？それともエピソード？>

ニュースの価値としては、まずケネディが暗殺されたという事実が最大のもの。そして次に、その犯人は誰で、その動機は？その背後関係は？とくることになる。つまり、ケネディ暗殺にまつわるエピソードは山ほどあり、それを発掘すればいろいろ出てくるのは当然だが、そのことにニュースとしての価値はあまりないはずだ。したがって、本作が描く5つの物語はニュースとしての価値があるものではなく、あくまでケネディ暗殺事件に関連して（非常に密接して）起きたエピソードということになる。

これはたとえば2011年3月11日に起きた東日本大震災については、どこまでの程度の規模の地震や津波が起き、どれほど甚大な被害が発生したかはニュースだが、そこで死亡したAさんBさんについて掘り起こされたさまざまな物語はすべてエピソード、というのと同じだ。

それを5年後の今、本作のような形に切り取って提示してくれると、確かにエピソードとしては興味深い。そのことにどこまでの意義があるの？それが私にはどうも・・・。

## <オズワルドの兄と母親の実像（？）にビックリ！>

ケネディが銃弾に倒れた後、その狙撃犯としてリー・ハーヴェイ・オズワルドが逮捕されたこと、そのオズワルドが2日後に公衆の面前で射殺されたことは周知の事実だが、ケネディとオズワルドが埋葬されるまでの4日間に、オズワルドの兄ロバート・オズワルドと、その母親マーガリート・オズワルドがこんな風に動いていたことにビックリ！もちろん、本作はヴィンセント・プリオリが書いた小説『Four Days In November』を原作として、ジャーナリストで小説家でもあるピーター・ランデスマンが脚本を担当し、初監督作品になったものだから、本作に描かれていることがすべて実像かどうか分からない。その点で、あまり「真実の物語」と強調されると、ニュース的事実と混同する恐れがあって、ちょっとヤバイ。

オズワルドの兄が、あんな風に逮捕されている弟のオズワルドと二人だけで面会し、あんなふうになじったり、論じたりしていたのはホント？また、オズワルドの母親マーガリート・オズワルドが、あんな風に息子オズワルドはアメリカ合衆国の工作員だと言い張っていたのはホント？

1960年代のアメリカの犯罪捜査能力がどの程度のものだったのかは知らないが、こんな有力な（？）ヒントがありながら、なぜアメリカの捜査陣はオズワルドの身柄の確保に失敗したの？そして、こんな有力なヒントがあるなら、オズワルド暗殺後も何らかの手がかりを得て捜査を進めることはできなかったの？そんな疑問が次々と出てくるが、さて・・・。

## <シークレット・サービスやFBIはどんな反省を？>

本作を観ていると、シークレット・サービスもFBIもそれなりに任務は果たしているが、当然のことながら「絶対」というものではないことがよくわかる。銃の所持が禁じられている日本では1960年10月12日の浅沼稻次郎・日本社会党委員長暗殺を例外として暗殺事件は少ないが、戦前は伊藤博文（1909年）、原敬（1921年）、井上準之助（1932年）、犬養毅（1932年）等たくさん発生していた。それに対して、銃の所持が認められているアメリカでは、リンカーンをはじめとして大統領の暗殺事件は多い。そこで、シークレット・サービスをはじめとする大統領警護チームが不可欠になるわけだが、いくら厳重に警備を固めても「絶対」ということはありえない。それは、テロ・スパイなど国家の安全保障に係る公安事件等の捜査を目的とするFBIだって同じだ。しかし、厳重な警備、水も漏らさぬ捜査態勢を敷いていたにもかかわらず、ケネディ大統領暗殺という合衆国最大の事件が起こる中、それぞれの責任者や担当者たちの責任追及や保身をめぐる人間模様が展開されることになる。

そんな目で、まずシークレット・サービスを見ると、本作ではダラス支局長のフォレスト・ソレルズを中心として描かれるが、さて、その行動（反省？）の賛否は？

他方、FBIではジェームズ・ホスティが1年半前からマークしていたオズワルドが、「家族への干渉をやめなければFBIを爆破する」という趣旨の脅迫文を自ら局に持ち込んでいたのに、それを支局長に報告していなかったことが大問題として浮上する。ジェームズ・ホスティの言い分は「こんな脅迫（文）をいちいち報告しては仕事にならない」だが、これに対する支局長のゴードン・シャンクリンの言い分は「そんな大切な報告をしなかったのは怠慢だ」というもの。両者の言い分を公平に聞いていると、支局長の言い分は「結果論」だと思うのだが、FBIとしては結果が起きてしまえば責任論が浮上してくるのはやむをえない。しかし、そんな内輪（モメ）の議論から導かれる、一つの結論とは・・・？

こんな姿を見ていると、シークレット・サービスもFBIもケネディ暗殺事件が発生したことについて、一体どんな反省をしているの？という疑問を持たざるをえない。

## <病院は？8ミリフィルムの価値は？その描き方は？>

本作の原題『Parkland』は共に銃弾に倒れたケネディとオズワルドが運び込まれた、テキサス州ダラスにある病院の名前。たまたまそこで新人研修をしていた、チャールズ・“ジム”・キャリコ、看護師のドリス・ネルソン、ベテラン研修医のマルコム・ペリーらが緊急に運び込まれたケネディ大統領とオズワルドの処置をしたというのは、ある意味当たり前だ。したがって、そのことがなぜこんな物語として取り上げる価値があるのか、私にはよく分からない。

それに対して、たまたま（とは言っても周到な準備を整えたいうえでのことだが）最新式の8ミリカメラでケネディ大統領が銃弾に倒れる瞬間を最高のアングルで撮影したエイブラハム・ザブルーダーに起きた物語は興味深い。ケータイ写真が普及した昨今では、たまたま撮影した写真が大きなニュースとなる事象をとらえれば、たちまち高値で売却できるから、ラッキー。それだけの話に過ぎないから、それは本作に見るザブルーダーのような物語になることはないだろうが、ザブルーダーの場合はなぜか、「ライフ」誌だけを特別扱いにして超貴重なフィルムを託することになる。ケネディ大統領暗殺の瞬間という歴史的瞬間を撮影したザブルーダーがなぜ本作が描くようなパニック状況に陥ってしまったのか、また、「事件のショックから立ち直れず、二度とカメラを手にしなかった」のはなぜなのかは本作を観ても私にはよく分からないが、さて、あなたのご意見は？